おーい図書館

No.164
発行　おーい図書館
代表　青木 和子
松戸市牧の原1-104-416
TEL. 047-311-0886

市民講座
「図書館が日本を救う
～図書館の可能性～」

主催　松戸市立図書館
講師　常世田 良 氏

2013年2月の講演会が大変好評だったので、松戸市立図書館主催としては二回目の常世田良さん（立命館大学教授）の講演会が、11月2日(日)、市民会館301号室で開催されました。市内外から、また議員の方々の参加もありました。皆様からの感想を、掲載させて頂きます。

中山　英夫

「自己判断自己責任」に、社会が変わってきている。その自己判断の材料として図書館を利用することができると、常世田さんは言われていました。

最近「自己責任」と言われることがあると思います。自己責任とは、自分が判断した結果に責任を持つということだと思います。責任を持つための判断は何に基づいて行うのか。その判断をするための情報が、図書館からも入手することができる。これは大切なことだと思いました。

今は、地方分権（小さな組織）と言われていますが、そこでも情報を集めることは難しいと言われていました。

情報過多の時代と言われていますが、いざ何かを調べようとすると、途方にくれる場合があると思います。そんな時に図書館に行って司書に相談してみる方法があるということは、一つの発見でした。

市民が利用する施設として、一位が図書館、二位がどこも利用しない、三位が体育館等と言われていました。図書館とは市民にとって身近な存在だと、今更ながら気付きました。

講演の最後に、質疑応答がありました。

図書館に全種類の社会科の教科書を収蔵してほしいという、市民の方の発言がありました。松戸市の図書館には、まだ全種類を収蔵してはいないそうですが、今後収蔵して頂き、市民の皆が閲覧できるようにして頂きたいと思いました。

匿名希望

一番に感じたことは、講演会参

加者で私と同年代の人がいなかったことで、大変残念に思いました。ぱっと参加者を見渡したところ、20代と思われるのは私一人で、大半は50～60代だったように思います。私と同年代の若い世代も、こういう話題にもっと関心を持って欲しいと思う次第です。

なぜ浦安市では、全国一とも言われる先進的な図書館を創り上げることができたのか？松戸市では何故できないのか？両自治体の違いは何か？（もっと広く言えば、図書館が充実している街とそうでない街の違い）等々の話についても、詳しく伺いたかったです。むしろ、現在の私の興味は、その一点に尽きます。財政的に豊かかどうか、キーパーソンとなる職員がいたかどうか等々、簡単な仮設はすぐに思い浮かびますが、要因はそれだけではない気がします。

私自身、以前は「図書館」と聞いて、「本を貸出す場所」「受験勉強のための自習室」という程度の認識しかありませんでした。

しかし、本日の講演をして頂いた常世田さん、及び菅谷明子さんの著書「未来を創る図書館」に出会い、図書館というものに対する認識・理想像について大きく転換させられた数多くの読者の一人であります。菅谷さんの著書「未来を創る図書館」には「図書館が無かったら、今の自分は無かった」との二スーヨーク市民の声が紹介されており、とても印象に残っています。

「わが街の図書館も、いずれはそんな賞賛を受けるくらい立派なものにしたいなあ！」という、わずかながらの薄れゆく願望から、本日の講演に参加しました。常にその思いは（少なくとも、市の職員である期間は）抱き続けていきたいと思います。

市議会議員　山中啓之

2013年2月9日に引き続き、11月2日に行われた常世田良氏（元浦安図書館長）の講座『図書館が日本を救う』に出席させて頂いた。

二回の講演を通じて痛烈に感じたのは、図書館の活用法が、これまでの暇つぶしのための余暇の読書ではなく、ビジネス支援や日常生活の問題解決の情報収集にシフトしていることだ。いわゆる"消費者"のための図書館ではなく"生産者"のための図書館である。利用者は情報を得て、そこから更なる価値を生む。この循環こそが人間と社会を育てる。更にその際、必要な時に必要な答えを提供してくれる図書館には司書によるレファレンスも欠かせないと、浦安図書館を訪れる度に痛感する。

自己判断・自己責任が求められる時代。IT化は進み、メディアに触れる機会は多くなった一方、情

報過多で（時にはシンプルな事でさえ）、むしろ本当に知りたい情報に辿り着くまでの過程が困難になったと感じることが、しばしばある。

例えば、松戸市議会では、最も基本的かつ重要な役割である各議員の「議案への賛否の態度」すら議会報にもHPにも掲載されない。それどころか、記録すら残していないのだ。平日の昼間に行われている議会の傍聴に直接足を運び、更にそこで44人の全議員の賛否態度を瞬時に峻別できる人は、果たして市民に何人いるのだろうか。

情報公開のこの時代に、特定秘密保護法案が成立した。市民は、情報へのアクセスの権利を求める声を、もっと盛り上げていかなければならない。致命的な情報ほど手に入らなくなってしまった感すらある。知りたいもの自体も、それを調べる適切な手段も、全ての叡智は図書館に蓄積されている。

翻って、松戸市の図書館費は、2億4800万円（H25年度予算）と減少傾向である。

毎回、質問の度に、行政内部における図書館行政の位置付けが低いことを痛感するが、これは、施設や本などのハード面、司書やレファレンスなどのソフト面だけの問題ではない。

浦安や我孫子、市川などの近隣市に比較的使い易い図書館が建ち並び、交通アクセスの良さからそれらを利用する松戸市民も多いと聞く。

しかし、いつまでも浦安に憧れるだけでは、事態は一向に改善されない。隣の畑ではなく自分の畑を青く見えるようにするには、我々市民が先ず積極的に利用して、実態に基づいた意見や要望を出して、どんどん図書館に関わっていくべきだと、改めて意を強くした講演会だった。

…そう、日本を救う図書館を救うのは、僕たちだ。

追伸：雨の中にかかわらず沢山の市民が集まった今回の講演会には、職員も少なからず参加していたことが、一筋の希望だった。

児童文学講座
「子どものこころ詩のこころ」

報告　青木　和子

2014年1月18日(土)　松戸市制施行70周年記念行事として、詩人・絵本作家の工藤直子さんの講演会が市民劇場で開催されました。主催は松戸市立図書館でした。

工藤さんの作品には、「てつがくのライオン」「ともだちは海のにおい」「ともだちは緑のにおい」「あいたくて」「のはらうたⅠ～Ⅳ」など多数あります。

工藤さんは、詩について、朗読

について、話されました。

朗読は「聞いている人が、自分が読んでいる気になれるように」「はっきり、くっきり、一番遠い所の人にも聞こえるように」「意味が判るように」「自分の感情を入れない」。詩の朗読は「耳から聞いて『詩の形』が判るように」。

そして　詩を朗読されました。

おれはかまきり

かまきりゆうじ

おう　なつだぜ
おれは　げんきだぜ
あまり　ちかよるな
おれの　こころも　かまも
どきどきするほど
ひかってるぜ

おう　あついぜ
おれは　がんばるぜ
もえる　ひをあびて
かまを　ふりまわす　すがた

わくわくするほど
きまってるぜ

ねがいごと

たんぽぽはるか

あいたくて
あいたくて
あいたくて
・・・
きょうも
わたげを
とばします

（以上「のはらうた」より）

するめ

まどみちお

とうとう
やじるしに　なって
きいている

うみは
あちらですかと…

書き手と読み手は、フィフティ！・フィフティー。読み手の経験の何かに心の深い所でひっかかる時、言葉は「杖」になり、読み手の創作物となる。

作品の好きな理由がわかるのは二番目に好きなもの。最も好きなものは、何かがひっかかってはいるが、好きな理由がわからない。

工藤さんは、その例として、北原白秋の作品を紹介されました。

薔薇二曲

薔薇ノ木ニ
薔薇ノ花サク

ナニゴトノ不思議ナケレド

幾つになっても、誰かに読んで頂くのは、なんて気持の良いものか、と思います。もっともっと読んで頂きたいと思える、至福のひとときでした。